

同志社大学一神教学際研究センター

日本オリエント学会 共催

公開講演会

二本角が表すもの

—西アジアにおけるアレクサンドロス大王の神聖化—

● 講 師 ●

やまなか ゆりこ
山中由里子

(国立民族学博物館)

● 日 時 ●

2005年12月17日(土) 午後2時～4時

● 場 所 ●

同志社大学 今出川校地 神学館3階礼拝堂

○入場無料・事前申込不要

○問い合わせ

同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

TEL. 075-251-3972 E-mail: staff@cismor.jp HP: <http://www.cismor.jp/>

～プログラム～

1) あいさつ 前田 徹 (早稲田大学第一文学部教授・日本オリエント学会常務理事)

2) 講演 やまなか ゆりこ
山中由里子 (国立民族学博物館民族文化研究部助手)

「二本角が表すもの—西アジアにおけるアレクサンドロス大王の神聖化」

3) 質疑応答 司会 中田 考

(同志社大学神学部教授・一神教学際研究センター幹事)

～講師紹介～

■ 山中由里子 (やまなか ゆりこ)

研究課題は中世イスラーム世界におけるアレクサンドロス伝承。アレクサンドロス大王の死後に彼にまつわる様々な言説が、古代ギリシア・ローマ世界からイスラーム世界へどのように伝わり、そこでどのような展開を遂げたかを比較文学的観点から研究している。

学歴

Kalamazoo College (米国、ミシガン州) 卒 (1988)

東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了 (1991)

東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退 (1993)

職歴

東京大学東洋文化研究所助手 (1993)

国立民族学博物館民族学研究部助手 (1998)

国立民族学博物館民族文化研究部助手 (2004)

学位

学術修士 (東京大学大学院総合文化研究科 1991)

「二本角が表すもの—西アジアにおけるアレクサンドロス大王の神聖化」

国立民族学博物館 山中由里子

講演概要

西アジアに伝わるアレクサンドロス大王に関する言説は、イスラームという信仰と不可分な関係にある。宗教書のみならず、歴史書や叙事詩においても敬虔な信徒、神に特別な権威を与えられた真の教えの布教者、聖戦の闘士、そして預言者として描かれている。アレクサンドロスがこのようにムスリムに神聖視されるにいたった背景には、コーランの「洞窟」の章に登場する二本角（ズー・ル=カルナイン）と「アレクサンドロス物語」の深い関わりがある。コーラン注釈書などに記録された伝承を通して二本角の啓示が下された経緯を明らかにし、古代アレクサンドリアに起源を持つ「アレクサンドロス物語」がイスラームに先行する一神教であるユダヤ・キリスト教のフィルターを通して二本角伝となった過程を辿る。また、この二本角アレクサンドロス伝が、イスラーム共同体の拡張の時代という歴史的なコンテキストにおいてどのような意味を持っていたかについて考察し、さらに、後の文学において、そのイメージがどう継承されたかを追ってゆく。

講演レジュメ

- 1 二本角のアレクサンドロス
 - 1.1 『コーラン』第18章「洞窟」82—97節
 - 1.2 「^{ズー・ル=カルナイン}二本角」の正体
 - 1.3 一神教とアレクサンドロス

- 2 アレクサンドロスの神聖化
 - 2.1 タバリー（923没）の『タフシール』（コーラン注釈書）
 - 2.2 サアラビー（1035没）の預言者伝集
 - 2.3 ニザーミー（1141-1209）のアレクサンドロス物語

参考文献

山中由里子「アラブ・ペルシア文学におけるアレクサンドロス大王の神聖化」『国立民族学博物館研究報告』27巻3号, 2003年, 395—481.

■日本オリエント学会について

日本オリエント学会は、1954年に三笠宮崇仁殿下の提唱により設立され、1963年からは、社団法人となった学術団体です。本学会は、古代文明の発祥の地として知られるチグリス・ユーフラテス川流域（メソポタミア）からヘブライ語聖書の故地を経てエジプトに至る、いわゆる古代オリエントだけではなく、これらの地域を中心としてその後の歴史的転変をへて現代にいたる、歴史的にも地理的にもひろい概念であるオリエントの世界を研究対象としています。

古代の言語を読み解くことでその地域の言語、宗教、文化、社会の実態を明らかにしようという研究、この地域を現在おおっているイスラームの文明の諸相を解明しようという研究、現代の国家や地域の諸問題を解き明かそうという研究、これらさまざまな研究対象を、考古学的発掘、歴史や宗教文献の文献学的読解、現代社会の社会科学的アプローチなど、多様な手法を用いて研究しています。北海道から九州まで各地の研究者を会員にもつ全国的規模の学会であり、現在700名ほどの会員がさまざまな研究活動を展開しています。

会員の成果は年次大会で発表されたり、本学会機関誌『オリエント』（年2回刊行）や欧文機関誌Orient（年1回刊行）に掲載されたりします。このほか、これまで学会として数冊の記念論文集を刊行し、一般読者向けの叢書を企画しています。昨年は創立50周年を記念して『古代オリエント事典』（岩波書店発行）を編集・刊行しました。

■一神教学際研究センターについて

「一神教学際研究センター」は、一神教世界について学際的で総合的な研究・教育活動を行い、文明の共存の実現をめざすスペシャリストを養成すると共に、その研究成果を世界に向けて発信し、イスラーム世界とユダヤ・キリスト教世界の「仲介者としての役割」を果たすことをめざしています。

中東で生まれた3つの一神教、すなわち、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは「兄弟の関係」にありながら、欧米とイスラーム世界は対立・抗争の歴史を繰り返してきました。今日の世界が直面している「文明の共存」と「安全保障」の実現のためには、一神教について、文明論的な視座からの、「総合的」で「学際的」な教育・研究活動が必要です。同志社大学は、新島襄による創立以来、キリスト教研究とアメリカ研究に力を注ぎ、高い評価を受けています。「一神教学際研究センター」では、一神教文明をトータルにとらえるために、宗教研究においては研究対象をイスラームに拡大し、地域研究においては、中東・東南アジア・EU・ロシアに拡大し、地域研究、国際関係、安全保障、科学史を含んだ学際的で総合的な研究・教育活動を実施しようとしています。

歴史的しがらみから自由な「外部」に位置する日本だからこそ実現できた研究・教育センターであり、3つの一神教を同時に本格的かつ学際的に研究できる場所は、世界にも例を見ません。また、日本における一神教研究の歴史は浅く、その理解は十分であるとはいえません。一神教に対する理解を高めることにより、その対極にある、多神教に基づく日本文明をより深く理解することにも貢献します。